

外国籍等の子どもたち向け翻訳教材：ニーズ分析から見える課題

山 崎 けい子

富山大学人文学部紀要第 62 号抜刷

2015年2月

外国籍等の子どもたち向け翻訳教材：ニーズ分析から見えてくる課題

山 崎 けい子

1. はじめに

これまで山崎他(2009)(2011)では、外国籍等の子どもたち支援のひとつの方向性を示すべく、翻訳教材を作成する背景理論、過程、成果などを述べて来た。山崎他(2009)では、「富山のような外国籍年少者散在地域において、外国籍年少者を軸に、学校、保護者、地域ボランティア、行政などが集まり協力し合うことで不足する支援の力を強め、相互に学び合いながらサポートの連携を結ぶより良い方法はないだろうか」と考えた。「集うためには集う理由、何らかの求心力が必要である。翻訳教材は、1) 外国籍年少者のために作られるものである。2) 翻訳に携わる者自らの言語学習にも役立ち、やりがいにつながるものである。これらが、子ども達を軸に、学校関係者、保護者、地域ボランティアなどを集める求心力の礎となるのでは、と企画されたのが『翻訳教材作成プロジェクト』である。」「複数の共同体の人々が同じ翻訳教材を子ども達の教科学習等に使用する」ということは、共有した媒介物(翻訳教材)を中心に、あるいは、共有した媒介物(翻訳教材)が移動することで、メンバーやそれぞれの「共同体がつながり、新たな関係が築かれていく。」「関係を持つことで触発されそれぞれに変化をしていく。」「このような変化こそが共同体の再生産であり、学習である」という考え方をとった。

山崎他(2011)では、4年間の実践を、『どっちから勉強する?日本語?母語?:小学校国語教科書翻訳教材(光村図書 小学校「国語」教科書4年生準拠)』発刊という形に収束させるにともない、「このような言語学習環境のデザインが実際にどのように機能したのか、検証と考察を行な」い、「散在地域の外国籍年少者日本語言語学習の支援モデルの試案をまとめ」ている。

本稿では、その後、この発刊された翻訳教材が、実際にどのような求めに応じて送付されたかを分析する。現実のニーズの分析をすることで、その重要性和課題を探ることが本稿の目的である。

2. 翻訳教材発刊までの経緯

山崎他(2009)(2011)で示したように、「子どもラーニングサポート北陸¹⁾」という外国籍等の子ども支援ボランティアグループでは、2008年から2011年3月までHP上で、小学校4年生向け国語教科書作品の翻訳教材、母語用ワークシート、母語翻訳音声等を公開していた。1

1) 「子どもラーニングサポート北陸：外国籍の子どもたち支援の情報サイト」

URL: <http://kodomolasa.jimdo.com/>

年に1作品を加えるという形で、少しずつ数を増やしていた。HPで公開していたのは、いつでもどこでも求める者が簡単に入手出来るという利便性を追求したためであった。しかしながら、HP公開を続ける限り、著作権等をクリアするために毎月支払いを続けなければならないという予算上の足かせがあった。毎年掲載数を増やしていく事で、その額も増えていった。

一方、その当時、実際の教育現場からのフィードバックとして、開発中の日本語用ワークシート²⁾の内容の徹底した軽減化が求められていた。現場は時間が逼迫しており、国語教科書作品のあらすじを分からせるだけでも精一杯だという声が多く届いていた。単なる作品からの抜き書きの問題ですら出来ない子どもが多く存在するという声も上がってきていた。既にHPで公開中だった母語用ワークシートも同様の内容軽減要求を受けていた。子どもの母語の能力は様々でじっくりと時間をかけて母語用のワークシートをすることが難しいようだった。また、それまでは別々に考えていた、日本語用ワークシートと母語用ワークシートの内容も一致させた方が使いやすいという意見もあった。

予算上の問題と、ワークシートの内容の軽減、日本語用ワークシートと母語用ワークシートの内容の一致という大幅な変更を一挙に行い、それをまとめて冊子版として発刊することにし、2011年3月をもってHP上での教材公開を終了させた。冊子版にまとめるにあたっては、ワークシートの再開発、イラスト、あらすじ文の作成等を行った。また、冊子版に対して再度著作権等の契約を取り交わし直す事務的な作業も行った。

2011年3月に発刊した翻訳教材の内容は次のとおりである。

『どっちから勉強する？日本語？母語？』	
小学校国語教科書翻訳教材（光村図書 小学校「国語」教科書4年生準拠）	
<目次>	
1. はじめに	1
2. この本の使い方	2
3. 翻訳文	
3.1 『白いほうし』	3
中国語版（簡体字版、繁体字版）、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版、タイ語版	
3.2 『一つの花』	21
中国語版、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版、タイ語版	
3.3 『ごんぎつね』	36
中国語版（簡体字版、繁体字版）、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版	
3.4 『アップとルーズで伝える』	63
中国語版、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版、タイ語版	
4. 粗筋理解のためのイラスト	74
『白いほうし』『一つの花』『ごんぎつね』	

2) 日本語用ワークシート、母語用ワークシート、ともに、作品のあらすじを分からせ、内容の読解ができるようにするための問題ワークシートのことである。

5. 母語学習用ワークシート	
5.1 『白いぼうし』ワークシート	83
中国語版, ポルトガル語版, タガログ語版, ロシア語版, タイ語版	
5.2 『一つの花』ワークシート	93
中国語版, ポルトガル語版, タガログ語版, ロシア語版, タイ語版	
5.3 『ごんぎつね』ワークシート	103
中国語版, ポルトガル語版, タガログ語版, ロシア語版	
5.4 『アップとルーズで伝える』	111
中国語版, ポルトガル語版, タガログ語版, ロシア語版, タイ語版	
6. 日本語学習用ワークシート	116
『白いぼうし』『一つの花』『ごんぎつね』『アップとルーズで伝える』	
7. 母語学習用・日本語学習用 ワークシートの答	123
『白いぼうし』『一つの花』『ごんぎつね』『アップとルーズで伝える』	

このように、大部の翻訳教材となった。A4サイズで、厚さ0.9センチ、重さ約450gである。

3. ニーズ分析

3.1 分析対象

発刊された翻訳教材『どちらから勉強する？日本語？母語？：小学校国語教科書翻訳教材(光村図書 小学校「国語」教科書4年生準拠)』を活用してもらうため、2011年4月から富山を中心とした関連機関、知人に配布し出した。暫くして、「子どもラーニングサポート北陸」側から繋がる事の出来る配布先には渡し終わり一段落したが、残部が100冊足らず出たので、全国に送付することにした。2011年度には、自らのHP、子ども支援関連のメーリングリスト、学会や研究会等で、送付を始めたことを告知した。

しかしながら、その送付方法は送付希望者に負担を強いる形となった。まず、送付を希望する人が自分で定形外の返信用封筒を購入し、自分の住所を記入し、切手を貼った上でこちらに郵送するという方法である。予算的に返信郵送料の捻出が困難であったこと、こちらでの宛先書き等が無用にし、ポストに投函出来る方法で行いたかったためである。さらに、送付希望者のニーズを知るため、どのような立場でどのように使用するかも明記してもらった。

<実際にHP上に書かれた入手希望者への説明>

☆入手ご希望の方は以下の要領でお知らせください。郵送いたします。

- 1) 次のことを簡単にお書きください。
 - ・お名前と、この教材をどのような立場でどのようにお使いになるか。
 - 2) 返信用封筒(角形2号(240×332mm))に宛先(郵便番号、ご住所、お名前)をご記入の上、290円分³⁾の切手をお貼りください。
 - 1) 2)を次の住所に封書でお送りください。
(住所省略)
- (1冊分の郵送方法です。2冊以上ご利用の方は、メールで別途ご相談ください。)

3) 返信用封筒に貼る切手代は、8%の増税のため、2014年4月からは300円をお願いした。

このような負担をこなして、送付を希望した人々のニーズは切実だったと考えられる。それ故か、教材をどのような立場でどのように使用するかに書かれた内容は、実際の現場がどのようなかが分かるように丁寧に説明されていたものがほとんどであった。

最初に送付希望が来たのは2011年6月で、その後2014年8月までの送付先は全46件、合計65冊⁴⁾の送付を行った。ここで得たものをデータとして、分析を行う。

3.2 分析方法

今回、3.1で述べた送付希望者の記述等から、得られた情報は、次の5点であった。

- 1) 送付希望者の在住都道府県、つまり、どのようなく地域>から求められたのか。
- 2) 送付希望がどのようなく時期>になされたのか。
- 3) 送付希望者がどのようなく所属、身分>であるのか。
- 4) 教材を使用する<状況や目的>がどのようなものであるのか。
- 5) 使用する対象の子どもの<国籍>はどのようであるのか。

1) 地域、2) 時期については、全46件について正確に情報を得た。また、3) 所属、身分も、大まかではあるが情報を得た。しかしながら、4) 状況や目的、に関しては記述だけではっきり分類できないものもあった。それらはデータから除外した。5) に関しては、記載のあったものだけを分析することにした。

4. 分析結果

4.1 地域

送付希望者があった全46件は以下の17都道府県からであった。

表1：都道府県別送付希望者の件数

都道府県	神奈川	愛知	石川	東京	滋賀	兵庫	埼玉	千葉	大阪	北海道
件数	7	7	5	4	4	4	3	2	2	1
都道府県	新潟	静岡	富山	岐阜	奈良	岡山	熊本			
件数	1	1	1	1	1	1	1			

比較をするために、全国状況を見る。文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査（平成24年度）の結果について⁵⁾」の中の「日本語指導が必要な外国人児童生徒の学校種別在籍状況（都道府県別）」から見ると、小学校に外国人児童数が多い上位10

4) 残部に限界があったので、なるべく広く渡るように、出来れば1冊、多くとも3冊を上限として送付することにし、送付希望者の理解を得た。(実際には何十冊単位での送付を希望してきたところもあったが、上限の3冊を送付した。)

5) 文部科学省 HP : http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/1332660.htm

県は以下のとおりである。

表2：日本語指導が必要な外国人児童の在籍状況（都道府県別）

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
都道府県	愛知	神奈川	静岡	三重	東京都	大阪府	埼玉	岐阜	千葉	群馬
児童数（人）	4072	1745	1681	1091	959	826	760	688	637	608

表1と見比べると、網かけの8都府県から、本翻訳教材の送付希望があったことが分かる。また、表2の順位は後に11位滋賀県（607人）、12位兵庫県（436人）と続くが、それらの県からも本教材の送付希望がある。もともと日本語指導が必要とされる児童数の多い都道府県から送付希望者が出ているのは当然のことだろう。

一方、北海道（44人）、新潟（81人）、奈良（43人）、岡山（45人）、熊本（22人）は、前述の文科省の調査では日本語指導が必要とされる児童生徒数児童数が（ ）に示したように二桁台である。まだ支援が拡充していないと推察されるところからも送付希望者が出ている。

なお、表1に、石川（47人）が上位に入っているのは、つながりの深い県で情報交換が頻繁であることが要因であろう。富山（236人）が少ないのは、送付前にこちらから既に配布しているからだと思われる。

4.2 時期

最初の送付希望があったのは、2011年6月であった。その後、全46件の送付がどの時期に行われたか以下の通りである。

表3：送付希望がなされた時期

年 月	2011 6月	8月	9月	10月	11月	12月	年間 合計							
送付 件数	1	14	7	9	0	2	33							
年 月	2012 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間 合計	
送付 件数	1	1	0	1	0	3	0	0	1	0	1	0	8	
年 月	2013 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間 合計	
送付 件数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
年 月	2014 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月					年間 合計	
送付 件数	0	0	0	1	1	1	0	1					4	

やはり発刊当初に種々の紹介活動を行っていたこともあり、2011年度が33件と集中している。実は、HP上で翻訳そのものは既に3年程公開していたので、あまり送付要求は来ないか

もしれないと考えていた。しかし、現実には相当数の送付要求があった。

その後、2012年も引き続き途絶えること無く要求があったが、その数は激減していった。2013年は1件のみとなり、希望先にはほぼ行き渡りこのまま本翻訳教材の役割は終わっていくのだろうと考えていた。しかしながら、2014年になってから再び、送付要求が出てきた。2014年に送付希望をして来た県は、富山、石川、愛知、兵庫である。これをどう理解すれば良いのかは難しいが、いずれも送付（郵送）、あるいは配布（本稿の分析対象外）した冊数が相当数あるところであるので、既に使っている人からの口コミで新たな送付要求があったのかもしれない⁶⁾。あるいは、現場で指導する者の入れ替わりなどがあり、新しい人材の新たな要求がでてきているのかもしれない。もし、新たなニーズが現れてきているのであるなら、翻訳教材の重要性を示すものであるが、残念ながら残部はほとんど底をついている（2014年9月現在）。増刷するためには、また新たな著作権をクリアするための予算と契約が必要になる。

4.3 送付希望者の所属・身分等

送付希望者の所属と身分等は次のようであった。尚、一人で二つの身分を持つ者が4人いた。例えば、大学院生であり、かつ、日本語指導協力者である場合には、2度数えたため、全部で49人分の所属と身分が分類されている。

表4：送付希望者の所属・身分等の分類

送付希望者の所属・身分	人数
教育委員会関係	
教育委員会・日本語指導員等	4
教育委員会が委託したNPO団体日本語支援教室等・日本語指導者	3
教育委員会・語学相談員等	2
教育委員会・職員	1
教育委員会・日本語指導協力者等	1
教育委員会が委託したNPO団体日本語支援センター・日本語支援者	1
小計	12
学校関係	
小学校・教諭（日本語指導教室等担当）	5
小学校・教諭、校長	2
中学校・教諭（日本語指導教室等担当）	1
中学校・教諭	1
高等学校教諭	1
公立学校・非常勤講師	1
小計	11

6) 事実、そう書かれていたものも1件あった。

外国籍等の子どもたち向け翻訳教材：ニーズ分析から見えてくる課題

民間団体		
日本語支援等ボランティア団体・メンバー		6
日本語支援等ボランティア団体・代表		3
NPO日本語支援等団体・コーディネーター等		2
	小計	11
公的機関関係		
国際交流協会等・職員		5
公的支援センター・職員		1
公的日本語支援教室・日本語支援者		1
公的機関からの委託・多文化サポーター		1
	小計	8
大学関係		
大学教員 大学院教員		3
学部生		2
大学院生		2
	小計	7

結果として、教育委員会関係、学校関係、民間団体というカテゴリーの小計がほぼ同数となり、そこへ、公的機関関係、大学関係というカテゴリーが僅差で続いている。大学関係は間接的な関わりを示唆するものでもあろうが、学校関係者、教育委員会、民間団体、その他公的機関が様々な角度からそれぞれに支援の手を伸ばそうとしていることがわかる。もし、これらが同一箇所にあるのなら、豊かなサポートの手が集まっているということになるのであろうが、実際にはそうではないところが多い。

例えば、4.1地域で言及した、外国籍児童の少ない散在地域と考えられる、北海道、新潟、奈良、岡山、熊本からはどのような所属、身分で送付要求をしたのであろうか。個人の特定が出来ないように順番を変えて記すが、小学校・校長、教育委員会が委託したNPO団体日本語支援教室等・日本語指導者、日本語支援等ボランティア団体・メンバー、日本語支援等ボランティア団体・代表、大学教員という様々な所属・身分の人が1人ずつ送付を希望してきている。ここから、どこかイニシアティブをとっているようなところがあるのではなく、実際の目の前に子どもを助けるために、気がついたところが手を差し伸べている状態であることが伺える。全国的にはこのような散在県の方が多いのが現実であろう。

では、外国籍等の子供が多く、本教材の送付要求も多かった、神奈川県、愛知はどうなっているだろうか。

神奈川県は、教育委員会・日本語指導員等、教育委員会・日本語指導協力者等、日本語支援等ボランティア団体・メンバー、日本語支援等ボランティア団体・代表、公的支援センター・職員、大学教員、大学院生という、所属と身分の人たちからの送付要求だった。

愛知は、教育委員会・語学相談員等、小学校・教諭(日本語指導教室等担当)、中学校・教諭(日

本語指導教室等担当), 中学校・教諭, 日本語支援等ボランティア団体・メンバーなどであった。

神奈川は, 教育委員会関係, 民間団体からが多く, 愛知は学校関係からが多いという特徴はあるが, 複数の場所からの支援の手が伸びている様子が分かる。子どもの数が多いので当然ではあろうが, 散在地域にはない支援の豊かさが伺われる。

4.4 教材使用状況・目的

教材をどのような状況で使用するのかについて, 特定出来たものを大別すると次のようになった。

表5：教材の使用の状況

教材使用状況	数
学校内の取り出し授業	18
学校外の学習支援教室／個人指導	10
リソースルーム／書棚への蔵書	5
学校内在籍級の補助教材	4
学校外の特別活動 交流活動	3
学校内の特別活動	1
大学院の授業	1

当然, 国語教科書作品の翻訳教材は, 学校内で在籍級からの取り出し授業の中で使われようとしていることが一番多い。次いで, 学校外の支援の場で教材として使われようとしている。さらには, 数は少なくなるが, リソースルーム等の書架に蔵書されようとしていることがわかる。

その他, 少数ではあるが, 在籍学級の補助教材(宿題や自習教材)としても使われようとしている。学校内外の特別活動での使用や, 大学院の授業での教材としても使われようとしている。

更に詳らかにするために, 特定できた教材の使用目的についても分類を行った。一つの場所で複数の目的をあげているところもあったが, それらをまとめると5つの大きな分類が出来た。

1) 日本語学習や教科学習が主軸, 2) 母語学習が主軸, 3) 派生的な使われ方, 4) 海外での使用, 5) 間接的な使われ方, である。更に下位分類にも分けて, 使用目的について以下のようにまとめた。

表6：教材の使用目的

教材使用目的	数
日本語学習や教科学習が主軸	
(1)日本語学習・教科学習	26
(2)日本語学習・教科学習・日本文化	2
母語学習が主軸	
(3)母語学習(教室)	8
(4)母語学習(読み聞かせ)	1
(5)保護者と音読宿題内容の共有化	1

(6)年齢相当の母語教材で考えさせる	1
派生的な使われ方	
(7)中学生のための日本語学習 母語保持学習	2
(8)読書感想文指導	1
海外での使用	
(9)海外の教室での補習授業・交流活動の為の素材	1
間接的な使われ方	
(10)子ども支援者のための教材の閲覧・貸出	5
(11)指導者同士の情報提供・教材研究	3
(12)研究	3
(13)教員志望の学生への教材紹介	1

やはり、日本語学習や教科学習が主な目的となっている。「(1)日本語学習・教科学習」に関することだけが目的として書かれていたものは18件であった。その内、表5の使用状況ともあわせて見ると、「学校内の取り出し授業」の中での「(1)日本語学習・教科学習」と書かれているものが10件で、在籍級の活動の中でついて行けない内容を翻訳教材で学ばせようとしているのがわかる。「学校外の学習支援教室／個人指導」という状況でも7件が、「(1)日本語学習・教科学習」を使用目的としている。

一方、目的として、「(1)日本語学習・教科学習」と「(3)母語学習」を組み合わせられていたものは7件で、愛知（2件）、神奈川（2件）、岐阜、兵庫、奈良、からであった。その他、母語学習が主軸のニーズは、「(3)母語学習（教室）」と「(4)母語学習（読み聞かせ）」を併せて書いてきた愛知がある。「(5)保護者と音読宿題内容の共有化」は石川からのものであるが、「(6)年齢相当の母語教材で考えさせる」もやはり愛知からのものである。つまり、比較的外国籍等の子供の数が多く支援する場所が豊かなところで、母語学習について言及していることが多いと言えそうである。特に愛知県はそういうニーズがしっかり視野に入っていると言えよう。加えて述べるなら、母語学習を記述する場合は具体的によくわかるように書かれているものが多かった。教科学習とは切り離して語学相談員に読み聞かせをさせたいとか、母語が失われないように年齢相当の母語作品で子供の考える力を養いたいとか、子供の音読の宿題を出しているが保護者にも内容理解させ子どもと協力させたいとか、などである。

また既に言及したが、間接的な使われ方として、東京、神奈川、滋賀、大阪、兵庫がリソースルーム／書棚への蔵書という状況で、子ども支援者のために教材の閲覧・貸出などを目的として集めている。やはり、外国籍の子どもが多い都府県では、広くサポートの要となろうとする機関⁷⁾（県の機関やNPO法人）があると見える。

しかし、一般的には、翻訳教材を入手しようとしながらも、日本語だけでなく母語使用環境

7) 県の機関が3件、NPO法人（日本語支援団体）2件であった。

も支援すべき、日本語と母語の両面の学習を支えるべきだという考え方は、それほど主流ではないと言えよう。母語能力は当然持っているものとして、日本語学習や教科学習への利用だけを考えているのだろうか。教育現場としては、日本語学習、教科学習について行かせるだけで精一杯で、全く余裕のない状態であることも現実であろう。

なお、最初から中学生への使用のみを考えているものも2件あった。中学校の国語作品の読解は日本語が不十分な生徒にとって簡単なものではない。せめて簡単なところから分かせたいということであろうか。また、海外で補習授業や交流活動のための素材として使いたいというものもあった。直接子供の指導に使うのではないという、間接的な使われ方もあった。翻訳教材はどのようにでも料理出来、そのニーズが多様であることがわかる。

4.5 対象の子どもの国籍

どのような子供に使用しようとしているのかという、使用対象の子どもの国籍はあまり記入されていなかったが、子どもの国籍が書かれていた25件に限りまとめた。国籍は複数書かれているものもあった。なお、国籍のところで「中国に関わる」子ども、などと書かれている場合もあったが、便宜上中国国籍の中に含めた。ここで国籍が示しているのは、その国・地域の母語と、日本語の間で育っている子どもとする。例えば、中国人の母親の連れ子が、養子として、日本人の父親の籍に入ったため、日本国籍にはなっているが、「中国に関わる」子どもである場合等である。

表7：対象とされる子供の国籍

国籍	件数
中国	11
ブラジル	11
フィリピン	9
タイ	2
ロシア	1

中国、ブラジルが多く、それにフィリピンが続く。今回、タイやロシアも対応するように本翻訳教材は作られていたが、実際の需要は多くはなかったようだ。これは日本にいる子どもの国籍別の数からも容易に想像出来ることであるが、子どもの数は少なくとも、ニーズがある以上、各母語翻訳は存在すべきであろう。

今回、特に台湾を明記する場合は無かった。中国という国籍の中に含めていたとはあまり考えられない。繁体語による翻訳は、ニーズが低いのだろうか。それとも普通語の翻訳でまかなえるのだろうか。しかし、実際のところ、繁体字版の翻訳を行っていた台湾出身の翻訳者が、文法上も語彙上も、表現上もかなり普通語との違いがあると述べていた。

翻訳されていない言語の子どもたちの国籍も明記されている場合があり、パキスタン、ペルー、ボリビア、ベトナム、アメリカなどが付記されていた。

5. まとめ

これまで、5つの観点から、本翻訳教材へのニーズを分析してきたことをまとめる。

- 1) **地域**としては、外国籍等の子どもの数が多い都府県からの送付要求が多くあった。それ以外の子供の数の少ない道県からの送付要求も存在する。
- 2) **時期的**には、数は少なくなっているが、本教材へのニーズが途絶えることがない。
- 3) **送付希望者の所属・身分**は、多種多様であった。
- 4) **教材使用状況や目的**も多種多様であった。

母語学習も視野に入れている県は外国籍等の子どもの数が多いところに集中していたが、全国的には、日本語学習・教科学習のために母語を利用をするという傾向の方が強かった。外国籍等の子どもの数が多い都府県では、リソースルームのようなところで、広く教材を閲覧貸し出ししようとする動きが見られた。

派生的な使い方のニーズもあり、可能性のある教材であることが示された。

- 5) **対象の子どもの国籍**としては、中国、ブラジル、フィリピンが多くあげられたが、タイ、ロシアのニーズもあった。

6. おわりに

子供の学ぶ権利を保障するために、翻訳教材のニーズがある。負担のかかる入手方法をあえて行い、様々な場所から様々な人々が入手を希望した。富山という散在県の小さな取り組みに対する全国からのニーズが細々とではあるが、途絶えない。

翻訳教材という性格上、当然母語学習も視野に入れての使用になろうと考えていたが、そこまでの手が回っていないと思われるものもあった。『どっちから勉強する？日本語？母語？』というタイトルに込められた日本語、母語、双方からの学習という支援が出来る豊かな支援の環境が整うのは容易ではない。特に外国籍等の子供の数が少ないところでは、人材的にも予算的にも課題が多いのであろう。

そもそも、翻訳教材を作ることも人材的予算的課題がある。翻訳を行うことも大変であるが、既に述べたように、翻訳教材を発刊し広く提供するためには、著作権をクリアするための手続きに膨大な時間と手間を要し、少くない予算が必要であり、大きな障害になっている。

子どもたちの今の学びを止めることは出来ない。多種多様な人たちが助け合うことも不可欠であるが、必要なものを必要な人に届けるためには、公的な組織立った支援も必要になってくる。翻訳教材に対しては、埼玉県教育委員会やいくつかの取り組みが現在もなされているが、

もう少し大きな力が必要になってきているのではないだろうか。外国籍等の子どもたちが多いところばかりでなく、多くの散在道県の外国籍の子どもたちに対する課題が浮き彫りになっている。どんな子どもたちに対しても、日本語、母語両方の学習の保障を望みたい。本教材に対するニーズの小さな足跡が一つの提言になればと考える。

参考文献

- 清田淳子（2007）『母語を活用した内容重視の教科学習支援方法の構築に向けて』
- 深澤のぞみ・山崎けい子・田上栄子・中河和子（2008）「外国人散在地域における外国籍年少者支援の枠組み構築のために - 子どもラサ活動報告 -」『子どもラーニングサポート北陸』HP 2008年7月8日公開 (<http://kodomo-mirai.sakura.ne.jp/>)
- 深澤のぞみ・山崎けい子・中河和子・田上栄子（2009）「外国人散在（非集住）地域における外国籍年少者支援ネットワークに関する考察」『インターカルチュラル』第7号（日本国際文化学会）
- 山崎けい子・深澤のぞみ・中河和子・田上栄子（2009）「外国籍年少者のための日本語学習環境デザイン—散在地域の学習を支えるために—」『富山大学人文学部紀要』第51号
- 山崎けい子・中河和子・田上栄子（2011）「外国籍年少者のための日本語学習環境デザイン(2) —散在地域支援モデルの試案—」『富山大学人文学部紀要』第54号

本活動及び研究は「外国籍年少者の為の学習環境デザイン：散在（非集住）地域型共生サポートの形を探る」（平成20～22年度科学研究費補助金 基盤研究（C） 課題番号20520465 研究代表者：山崎けい子，研究分担者：中河和子，深澤のぞみ（平成20～21年度）），研究協力者：田上栄子を基にしている。『どっちから勉強する？日本語？母語？：小学校国語教科書翻訳教材（光村図書 小学校「国語」教科書4年生準拠）』はその成果物である。